書　　評

C. J. Bajema (eds.), *Eugenics: Then and Now*,
Dowden, Hutchinson & Ross, Inc., 1976, 382 pp.

本書は，Benchmark Papers in Genetics シリーズの第5巻にあたり，優生学なるタイトルの下に既存論文28編を集め一冊の本に編集したものである．編者は，この28論文を9部に分け，各部は2～6論文から成り，それぞれコメントが付けてある．

第1部は3論文とも優生学の父であるF・ゴールトンの（1865，1901，1905）歴史的論文である．

第2部は優生学における新マルサス主義者の見通しについて，J.H.ノイエス(1870)，H.H.ノイエス＆G.W.ノイエス(1923)，C.ダウィン＆G.A.ガスケル(1885)，J.クラパートン(1885)，H.エリン(1917)，M.サンガー（1922）が述べている．これらは，主に家族計画に関係した論文である．

第3部は優生手術の優生学的意味について，R.C.プーンネット（1917），H.ラーフリン(1922)，R.A.フィッシャー（1924），合衆国最高裁判所（1927），W.ショックレイ（1974）が述べている．即ち，優生手術法（優生保護法）のモデルの考案，また，優生手術を精神薄弱など劣悪遺伝形質を有する者に適用した場合の遺伝学的効果について述べている．

第4部は人工授精の優生学的可能性について，H.J.マラー（1960）とE.A.カールソン（1973）が述べている．カールソンは，マラーの優生学的思想，例えば，彼の提唱した精子銀行をもうけ，傑出人の精子による人工授精を普及して，人類の遺伝的改善を達成しようという生殖質選抜（germinal choice）を説明し，更にマラー死後の優生学について述べている．

第5部は優生学的環境―優生学的選択の必要条件について H.J.マラー（1934），J.S.ハックスレー(1936)，H.J.マラー他（1939）が述べている．マラーは資本主義のもとでの優生学はいくつかの克服できない矛盾を含んでいると主張している．ハックスレーは優生学的ゴール達成の為に必要な社会的環境における変化のいくつかを述べている．

第6部は優生学的仮説について F.オスボーン（1940），F.オスボーン＆C.J.バジュマ（1972）が述べている．前者は優生学の既念に環境を加えた．即ち，優境学なる既念を導入した．

第7部はC.G.ダウィン（1956）とG.ハーディン（1968）が述べている．前者はF.オスボーンの優生学的仮説に反論した意見を述べている．

第8部は人口抑制政策と実行の優生学的意味について，J.V.ニール（1970），C.J.バジュマ（1971），M.S.テイテルバウム（1972）が述べている．このうちテイテルバウムは遺伝病および先天異常の発生を少なくする為に，国費による遺伝相談サービス，全新生児を対象とする遺伝病のマス・スクリーニング，遺伝病を生む高危険率妊婦の羊水診断の必要性を述べている．これらに要する費用は，異常児を一生養なう費用に比べて経済的であると．

第9部は新優生学について，L.R.ダイス（1952）が遺伝相談を実行する為の具体的方法論を述べている．G.R.フレーザー（1972）は遺伝病の予防と治療が将来の遺伝子プールへどのような影響をおよぼすか論じている．

この本は人口資質を理解したり研究するのに必読の書であるばかりか，この分野の研究者は手元においておくべき良書である．

（今泉　洋子）